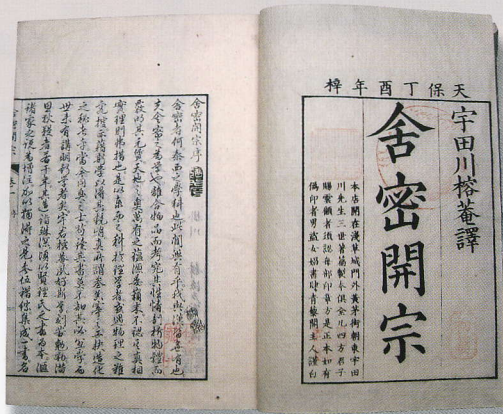


企画展 化学者展



舎密開宗

日本のノーベル化学賞受賞者は、1981年に福井謙一博士が初めて受賞してから昨2010年の鈴木章・根岸英一両博士まで7名に上ります。しかも2000年以降の受賞者が6名で、日本の化学研究および化学工業は、今では世界トップクラスと言えます。幕末のころに西洋の化学を取り入れ始め、明治30~40年ころには世界一流の化学研究がされるようになっていきます。日本の化学研究の本格的な開花は第2次世界大戦後になりますが、このように急速に進歩した背景には、先人たちのたゆまぬ努力がありました。本企画展では、明治から昭和初期にかけて日本の近代化学、さらに日本の学術研究体制を築き上げた4人の化学者の軌跡をたどります。

日本の近代化学のスタート

日本で西洋の化学が初めて体系的に紹介されたのは、宇田川榕菴(1798-1846)が著した化学書『舎密開宗』(1837-1847)です。オランダ語の“chemie”を音訳して「舎密(せいみ)」としました。「化学」という用語が書籍で初めて使われたのは、川本幸民(1810-1871)の『化学新書』(1861)です。

桜井錠二 (1858-1939)

24歳で日本人二人目の化学の大学教授となり、基礎科学研究を重んじ、それが国の発展につながるとしました。理化学研究所や日本学術振興会などの設立に貢献し、日本の学術研究体制を築きました。



18歳でロンドン大学に留学した最初の年に化学の学年末試験で受賞した金メダル

池田菊苗 (1864-1936)

物理化学が専門ですが、実用面では、昆布のうま味成分がグルタミン酸であることをつきとめ、新しい味覚として「うま味」を提唱しました。「UMAMI」は今や世界に通じる共通語です。

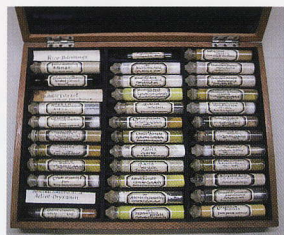


池田菊苗が最初に抽出したグルタミン酸試料「具留多味酸」(所有：東京大学大学院 保管および ©:味の素株式会社)

※展示されるのは複製品です。

鈴木梅太郎 (1874-1943)

脚気の研究から、米糠には微量でも生命に必要な物質があることを発見し、「オリザニン」(現在のビタミンB1)と名付けました。これは、事実上世界で最初のビタミン発見と言えます。



鈴木梅太郎研究室で抽出・分離された「米糠の成分」標本

真島利行 (1874-1962)

日本特産の漆の研究に取り組み、その主成分であるウルシオール(ウルシ)の構造解析および合成をしました。また、常に研究を重視し、多くの化学者を育て、日本の有機化学研究を世界一流に育て上げました。



ウルシオールの構造を決める際に真島利行が実際に使用したオゾン発生装置 (所蔵および ©:大阪大学総合学術博物館)

講演会のお知らせ

「科博所蔵資料から眺める日本の近代化学事始め ー日本人はこんなにかんばっていたー」

日時：2011年10月23日(日) 14:00~15:30
 会場：国立科学博物館日本館2階講堂
 講師：若林文高(国立科学博物館理工学研究部理化学グループ研究主幹)

申込方法等詳細は国立科学博物館ホームページでご確認ください。

ノーベル賞受賞者についての企画展も開催されます。

ノーベル賞 110 周年記念展

期間：2011年11月1日(火)~2012年1月22日(日)
 会場：国立科学博物館地球館地下1階特別展示室
 時間：午前9時~午後5時
 ※入館は閉館時刻の30分前まで
 料金：常設展示入館料のみでご覧いただけます
 休館日：毎週月曜日、12月28日(水)~1月1日(日)、1月10日(火)
 ※ただし、12月26日(月)、1月2日(月・休)、9日(月・祝)は開館
 主催：国立科学博物館、日本学術振興会
 共催：ノーベル博物館

関連展示・イベント情報 (常設展示入館料のみでご覧いただけます。)

世界化学年記念 化学切手展
 一切手でたどる化学の世界・日本の化学
 期間：2011年11月1日(火)~6日(日)
 会場：国立科学博物館日本館1階中央ホール
 主催：化学切手同好会、国立科学博物館
 後援：日本化学会

日本化学会「化学遺産認定」の紹介
 期間：2011年11月8日(火)~12月11日(日)
 会場：国立科学博物館日本館1階中央ホール
 協力：日本化学会 化学遺産委員会

〈交通ガイド〉

- JR「上野駅」公園口から徒歩5分
- 東京メトロ銀座線・日比谷線「上野駅」から徒歩10分
- 京成電鉄「京成上野駅」から徒歩10分

※駐車場はありませんので、お車での来館はご遠慮ください。

